

みんなの水泳……日々徒然

東京へ向けてのWPSの様々な動き

▶はじめに

前回は、2016年7月17-18日に横浜で開催された2016 Japan Para 水泳大会や、パラ水泳のルールなどについてお伝えしました。

今回は、リオパラリンピックが終わり、2020年の東京大会に向けて、IPC (国際パラリンピック委員会) 等で検討されていることなどについて、お伝えします。

▶IPCとは

International Paralympic Committeeの略称で日本語では国際パラリンピック委員会と訳されます。このIPCにJPC (Japanese Paralympic Committee / 日本パラリンピック委員会) が加盟しています。

IPCは1989年9月に設立されました。障がい者スポーツの国際的な統括組織として、定期的にパラリンピック大会を開催するなどの活動をしています。IPCモットーである「Spirit in Motion」は、パラリンピック選手のすぐれたパフォーマンスと、「人を勇気づける」というパラリンピックムーブメントの特性を表現しています。178の各国パラリンピック委員会 (NPC) が加盟 (2017年2月現在)。

IPC (国際パラリンピック委員会)

<http://www.paralympic.org/>



▶IPC SwimmingからWPSへ

IPCの中で、水泳に関する活動を統括しているのが、World Para Swimming (WPS) です。2016年11月30日からWPSとなりましたが、それ以前はIPC Swimmingという名称でした。

WPSは、パラリンピック大会や世界選手権など主要な大会の競技プログラムなどを定める、競技規則を定める、国際競技役員を養成する、クラス分け規則を定める、クラスファイアを養成する等を統括しています。



2014年から2017年まで適用のルールとレギュレーションがまとめられた冊子。右上に2014年発行当時のIPC Swimmingの名前があります

▶WPSで現在検討されているのは…

WPSにはいくつかのワーキンググループ等があり、様々なことが検討されています。現在あるのは、以下のグループです。

- Technical Advisory Group
- Classification Advisory Group
- Classification Review Project Management Group
- Competition Programme Working Group

Technical Advisory Groupでは、競技規則や競技役員等の養成等について検討しています。

Classification Advisory Groupでは、クラス分け規則やその他クラス分け関係事項や課題について検討しています。

Classification Review Project Management Groupでは、2016年から2018年のクラス分けシステムについて実施状況等を注視、課題抽出等に取り組みます。

Competition Programme Working Groupでは、2016年以降の主要なWPS大会の競技プログラムやMQS、枠の配分方法案などについて検討しています。

ただし、これらのグループが検討されている事項を決定することではなく、WPSのSTC (技術委員会) とWPS、およびIPCが最終的に決定します。

パラリンピック大会での水泳のメダルイベント数 (種目数) は、大会ごとに異なっています。2004年アテネ大会は166種目、2008年北京大会は140種目、2012年ロンドン大会は148種目、2016年リオ大会は152種目でした。リオが終わり、2020年東京パラ大会の競技プログラム等は今後発表されていくこととなります。

東京2020大会から新しい競技が加わることで、水泳や陸上競技など種目数の多い競技については競技プログラムや種目数の動向が気になると思います。



リオ大会の様子。今後2020年に向けてどのような変更があるのか……指導者も選手も情報収集が重要になります

▶クラス分けシステムの見直し検討

IPCはsports specific classification、つまり競技ごとにその特性にあったクラス分けのしくみや科学的な根拠に基づいたしくみの構築をめざして、ロンドンパラ以前からリサーチに取り組んでいます。

世界選手権等主要な大会時には、各国の集まる機会を作り、その進捗状況等についても経過報告がありますが、現在は肢体不自由のクラス (PI: S1-10, SB1-9, SM1-10) および視覚障がいのクラス (VI: S / SB / SM11-13) について見直し検討中とされています。

現在のPIのクラス分けシステムは、基本的には1992年に設定されたもので、マイナーチェンジを加えながら現在に至っています。

VIのクラス分けシステムについては、IBSAの規準で各競技共通です。視覚障がいのクラスについては、2016年のヨーロッパオープン大会等からドイツオープン大会など競技会の機会を使って、かなり多くの選手に協力を得て、リサーチを実施していたようです。水泳に必要な視覚機能とは何なのか、を見るために、視力や視野のみならず、動体視力や深視力等もテストしていました。

これらがリサーチの結果を受けて、どう変更されていくのか、されないのか、今後発表されていくと思われれます。

国内で競技会に出場するには…

パラリンピック大会への出場をめざす場合は、まず国内でパラ水泳の競技会に出場し、いい記録を出すことが不可欠となりますが、そのためには、日本身体障がい者水泳連盟、または日本知的障がい者水泳連盟のいずれかに登録し、指定大会にエントリーすることから始まります。

登録については、各連盟のHP等に掲載があります。地域連盟への登録、地域大会の情報、クラス分けの受検に関する手続きなど、事前にしっかりと確認しておくことが大切です。連盟の年度の行事予定なども掲載があります。前年度の各種大会の要綱などを読んでみるのも、必要な準備のイメージがつかめていかもかもしれません。

日本身体障がい者水泳連盟

<http://paraswim.jp/>



日本知的障がい者水泳連盟

<http://jsfpid.com/>



※全国障害者スポーツ大会については、各都道府県および政令指定都市ごとに募集がありますので上記とは異なります。